

# 熊大通信

vol. 77  
2020 SUMMER

## 特集 I

学びを止めない  
新型コロナウイルス感染症拡大防止対策下の熊本大学

## 特集 II

今、熊本大学で学ぶ  
熊本大学の学ぶ環境



執務中の蟻田功と天然痘の総てを記したレッドブック

## 天然痘根絶の軌跡

1980年5月8日 WHO (世界保健機関) は、天然痘がこの世界から根絶されたと宣言した。

天然痘は古代から人々の命を奪ってきた感染症であり、致死率も高く、後遺症に苦しむ人も多かった。1796年イギリス人医師ジェンナーによる牛痘種痘法の開発やワクチンの改善などにより患者数は減っていったが、第二次大戦後も三十カ国以上で発生や流行が見られた。

1958年 WHO は世界天然痘根絶計画を採択した。1962年厚生省から WHO に移った蟻田功<sup>ありたさお</sup>は、当初からこの計画に参加し、数多くの現場に赴き指揮を執ったが、戦いは天然痘だけではなくゲリラや内戦、差別や偏見などにも苦しめられる過酷なものであった。1964年からジュネーブの WHO 本部で指揮を執ることになり、種痘の善感率や安全性の向上、技術の特許公開に取り組んだ。

1977年ソマリアでの発生を最後に天然痘は地上から根絶された。この時、長きにわたって根絶計画を率いた蟻田は WHO の対策本部長となっていた。

現在、種痘は廃止されているが、再び猛威を振るう時に備え、ワクチンの保存や根絶への道のりを記録したレッドブックがまとめられている。

文 藤本秀子 (五高記念館)

### 蟻田功

1945(昭和20)年第五高等学校卒業、1949(昭和24)年熊本医科大学卒業。1957(昭和32)年熊本大学において医学博士号取得。現在は熊本大学の名誉フェローをつとめている。

※五高記念館(国指定重要文化財)は、熊本地震による被害のため長期休館中です。



## 熊大生、拓く。 海の玄関口におもてなしの思いを込めて

熊本の海の玄関口の一つ、八代港。ここに新しくできたクルーズ船の受入拠点「くまモンポート八代」には広い芝生などが整備された「くまモンパーク」が併設。寄港する観光客や県民憩いの場となる広場である。

「くまモンパーク」の一角にあるのは、熊本大学教育学部美術科のメンバーが熊本県とのコラボレーションで作成した壁画。見るだけでなく、絵で楽しめるようなトリックアートを学生のアイデアなどで作成した。観光客や県民に愛され、楽しんでもらえる場所となるようにという、学生たちの思いが込められた絵になっている。

## CONTENTS

- 03 特集Ⅰ 学びを止めない  
新型コロナウイルス感染症拡大防止対策下の熊本大学
- 11 研究室探訪 私たちは、どうやって認識している？  
見る、聞く、理解する、覚える、考える。  
文学部 心理学研究室
- 13 特集Ⅱ 今、熊本大学で学ぶ  
熊本大学の学ぶ環境
- 19 卒業生ジャーナル
- 21 KUMADAI TOPICS
- 22 熊本大学基金よりお知らせ

表紙 / 【原画】松永 拓己 / 大学院教育学研究科准教授  
インターナショナル広場の学生たち

### 熊本大学広報誌 熊大通信 vol.77

\*皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。

【発行】国立大学法人熊本大学  
〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1  
Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3110  
sos-koho@jimmu.kumamoto-u.ac.jp

【編集】熊大通信編集委員会  
大日方信春 / 委員長 大学院人文社会科学研究所 (法学系)  
安村 明 / 大学院人文社会科学研究所 (文学系)  
松永 拓己 / 大学院教育学研究科  
松永詩乃美 / 大学院人文社会科学研究所 (法学系)  
一柳 錦平 / 大学院先端科学研究部 (理学系)  
尼崎 太樹 / 大学院先端科学研究部 (工学系)  
坂梨 京子 / 大学院生命科学研究所 (保健学系)  
首藤 剛 / 大学院生命科学研究所 (薬学系)  
井口 英樹 / 総務部総務課広報戦略室

【制作】株式会社 談

## 特集 I

# 学びを止めない

～新型コロナウイルス感染症拡大防止対策下の熊本大学～

緊急事態宣言解除後、最初に行われた薬学部での対面授業の様子。「座席間の距離を1m以上確保」「マスク着用」「窓の常時開放」などの対策をとり、300人収容可能な講義室で、約70人の学生が参加して実施されました。Web会議システム（Zoom）での同時配信のため、講義中にパソコンやタブレット端末で接続する学生も多く、学びのスタイルも進化してきました

2020年4月16日、  
新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、  
全都道府県を対象にした  
緊急事態宣言が発出されました。  
熊本大学では学生の大学への入構自粛、  
遠隔授業の実施など、

学生、教職員の安全と健康に配慮しながら、  
いかにして「学びを止めない」環境を作るか、  
日々試行錯誤し実施してきました。

学生の不安を解消し、  
学びを継続するために、今、何ができるのか。  
全学的な取り組みは、現在も続いています。

※授業：講義・実習・実験を含む

# 決して学びを止めず、誰一人取り残さない — Leave No One Behind

大学教育統括管理運営機構では学生への対応や講義形態などを検討する新型コロナウイルス感染症対策チーム会議を立ち上げました。議長の市川聡夫理事は「誰一人取り残さないためにどうするか」をメンバーとともに考え続けたと語ります。



対面授業が行われても、登校できない学生もいるため、授業の様子を Zoom でも配信。さらに、録画して配信し「授業が受けられない」学生が出ないように配慮しています



対面授業が行われる机には QR コードが貼り付けられ、誰がどこに座ったかが把握できるようにしました

**徹底した検討とあらゆる準備を実施**

熊本大学において、学生の対応における対策を統括したのは、大学教育統括管理運営機構内に立ち上げられた、新型コロナウイルス感染症対策チーム会議です。基本的考え方は「誰一人取り残さない」ということ。SDGS（持続可能な開発目標）で掲げられる「Leave No One Behind」という言葉がキーワードです。「学生と教職員の安全と学びを止めないこと。この両立が不可欠です」。

「毎日会議を開き、あらゆる検討と準備を行ってきた」というチーム会議では、日々変化する状況にすぐ対応できるように、対面授業開始日を複数想定して対策を進めたほか、遠隔授業に関しても、教職員と学生の両者に徹底した調査とガイダンスを実施しました。Web会議システム（Zoom）のセキュリティ上の問題や、遠隔授業未経験の教員、学生側にある通信環境の問題など課題は山積み。教職員に対しては、総合情報統括センターを中心に開催した「熊大版遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」等で、Zoom 使用上の注意点や著作権の問題、さらには熊本大学の教職員と学生が使用



市川 聡夫 理事・副学長  
いちかわ ふうさお



原田 信志 学長  
はらだ しんじ

## 厳しい状況だからこそ、 そこから得られる「学び」を「力」に

熊本大学で「学びを止めない」ためにどうすべきか。学生の感染を防止するために何をすべきか。学生のために力を注いだこと、そして、今だからこそ考えてほしいことなど原田信志学長に伺いました。

### 熊本地震からの 学びと教訓が活かされた

新型コロナウイルス感染症予防のため、熊本大学がどう動くべきか。そう考えた時、すぐに頭に浮かんだのが4年前に私たちが経験した熊本地震です。その教訓の一つが、大学内での連携。熊本地震発災後の動きを活かし、私を議長とする、部局の連携がとれた新型コロナウイルス感染症対策会議を設置。各部署長をリーダーにあらゆる情報を吸い上げ、対策会議が対策の方針を決めるという連携をスムーズにとることができました。もう一つは広報です。情報や方針をどう発信し、教職員と学生全員の意思をどう統一するか。対策会議では情報の発出と、受け取る側である学生たち、特に新入生の情報環境の把握や支援にも力を注ぎました。しかしながら、今回は、予測ができないという点が熊本地震との決定的な違いでした。日本国内が落ち着いても、世界全体が元に戻るまでは長い時間がかかると考えられ、予断を許さない状況は続いています。

### 自分はどう生きるのか これを機に、考えよう

これは、教育と研究のグローバル化

を推進する大学にとっては、厳しい事態です。しかし、今の時点では、学生にはポストコロナを見据え、この時期にできることに真摯に取り組み、自力を高めてほしい。遠隔講義を活用し、養った知識を、実習や実験など、遠隔では十分にできない学びができるようになった時に活かしてほしいと思います。大学側も、講義のオンデマンド化などで、学生自身がより計画的・効率的に学べる仕組みを構築していかなければならないと考えています。

このような事態の中では、様々な情報が社会にあふれます。何が正しく、何が間違っている、自分はどう考えてどう動くのか。これを機に、情報を見極める力を養ってください。同じようなことは、今後も起こる可能性があります。大学では、理・医・薬・工学部であれば、疾患そのものの解明、治療法や治療薬、ワクチンの開発、医療装置の開発などで直接的な社会貢献につながる学びができるかもしれません。文教育・法学部であれば、非常事態に対する施策をどうすべきか、人はどう考え、どう行動するべきかを考えることで貢献できるはずです。この厳しい状況を少しでも前向きに捉え、熊大生には強く生きる力、社会に活かせる力を身につける道を歩き続けてほしいと思います。

しているeラーニングシステム(Moodle)の活用などの情報を発信しました。加えて、全学生の自宅での通信環境を徹底調査。アパート住まいの学生などでWi-Fiの通信状況が悪くなるケースや、そもそもパソコンがないという学生に対応し、Wi-Fiルーター50台、パソコン200台も確保しました。

どう考えどう行動するか  
自ら判断する力を

「一番しんどかったのは新入生。大学に来ることなく入構自粛となってしまいましたから。Moodleに入る方法、履修登録のポータルサイトであるSOSSEKIの使い方も全然分からないわけです」と市川理事。そこで情報基礎科目を担当する教員が、4月中旬に一年生に対しガイダンスを実施しました。三密を避けるため一回のガイダンスの出席者数を少なく制限した代わりに、4日間フル回転。一年生が履修登録や遠隔授業ができるよう準備を進めました。

4月21日から一部遠隔授業を開始し、6月からは、三密を避けられない授業は引き続き遠隔授業で行うと共に、研究室および講義室内に入る人数の制限、誰がどこに座ったかを記録するQRコードの貼付など様々な対策

※SOSSEKI：熊本大学事務情報システム  
を施し、対面授業も部分的に開始されています。熊本地震の非常事態と違い、新型コロナウイルスに関しては先が読めないという厳しさがありませんが、「日々状況が変わるから、過去の考えや対策にとらわれずその時考えられる一番いい方法を取っています。学びは決して止めていません。そして在校生やこれから熊本大学を目指す人にも、自ら考え、行動できる人になってほしい」と市川理事。大学は自立して学ぶところ。熊本大学で、自分で判断して対応するという力を付け「この不確実な時代に立ち向かえる人材になってほしい」と思っています。



学生が建物入り口で検温を受ける様子



マスクを着用しての授業。これまで講義室での飲食は原則禁止されていましたが、今後は熱中症対策として水分補給を促すことが決められました

# 非常事態の学びを支える 15年来の戦略的情報インフラ整備

熊本大学で4月21日から開始された遠隔授業システム。その運用の基礎となったのは、15年前から運用されてきたeラーニングシステムや、履修登録システムでした。学内の情報インフラ整備の最先端を担ってきた、宇佐川毅理事にお話を伺いました。

システム運用と  
外部・内部の知の共有  
「学生の学び」を支援する

感染症予防対策の中で、遠隔授業を潤滑に実施するための中心的役割を担ったのが、総合情報統括センターです。同センターはこれまで、計算機システムを運用し学内LANなどの整備を行ってきました。2004年から6年間センター長を務めた宇佐川毅理事は、「全学で、履修登録から成績の管理まで行うSOSSEKIは、1999年には運用が始まっています。さらに、教職員と学生だけが使えるeラーニングシステムも運用されており、熊本大学はすでに、授業内容を電子的に伝える仕組みを15年来有しています」と話します。

今回の教育現場の遠隔授業については、全国の大学を中心とした教育機関の基幹ネットワークを管理する国立情報学研究所が、遠隔授業を実施する際の課題等を共有するため、サイバーシ

ンポジウムを開催。熊本大学からは同センターのメンバーが中心となってセッションに参加し、熊本大学では何が足りないのか、洗い出しを行いました。その後同センターが中心となり、教職員に対しては、Zoomで講義を行う主催者側としてセキュリティを確保するための説明会などを開催し、ヘルプデスクの設置も行いました。遠隔授業が開始されたあとは、内部の知を共有するために「熊大版遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシポジウム」を開催。これまで、Zoom利用上の注意点や、学生が理解しているか確認の徹底、通信環境が違う学生の公平性を担保するため、著作権上の問題がなければ講義を録画し、Moodleに動画を上げることなどが伝えられました。2回目以降も、教員による事例紹

報学研究所が、遠隔授業を実施する際の課題等を共有するため、サイバーシ

## 新入生を支えた学生たち

新入生歓迎イベントができなかった今年。先輩たちは、方法を工夫して新入生の不安を減らし、大学生活やサークルの魅力を発信しました。体育会系サークルを取りまとめる体育会と、熊本大学の学園祭である紫熊(しぐま)祭を実施している紫熊祭実行委員会の代表に聞きました。



体育会  
熊本大学体育会第61代本部委員長  
おくた こうち  
奥田耕大さん(工学部社会環境工学科4年)

人と会うことが制限される中で、体育会全体が一丸となって工夫を凝らし、新入生にメッセージを発信しました。部活の仲間、大学や卒業生の方々からも多くの応援や励ましの言葉を頂き、この感謝の気持ちを忘れずに、前を向いて活動していきたいです。



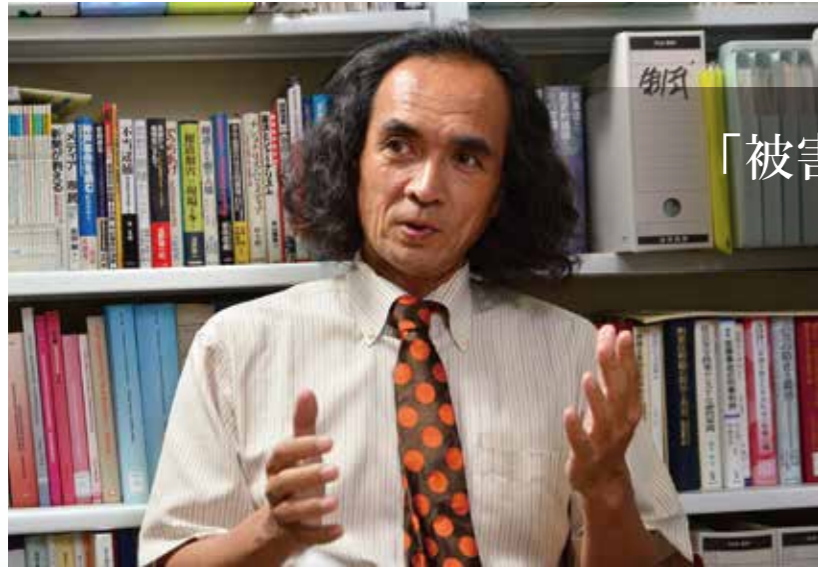
紫熊祭実行委員会  
第九回紫熊祭実行委員会委員長  
ふじもと けい  
藤本圭さん(教育学部小学校教員養成課程3年)

勧誘だけでなく、ツイッターでの悩み相談など、新入生の不安を減らす働きかけを行いました。その中で紫熊祭についても発信し、180名を超える新入生が入会。活動の制限がある中で、工夫をして、目標を達成した経験を、今後に活かしたいです。



宇佐川 毅 理事・副学長  
うさかわ つよし

# 学外の学びも止めない



大学院人文社会科学部/法学部シンポジウム

## 「被害者分断の克服に向けて」

今も、分断され続ける私たち  
分断の構造を知り、解決の糸口を考える

大学院人文社会科学部 (法学系)

岡田 行雄 教授  
おかだ ゆきお

「被害者分断の克服に向けて」  
今も、分断され続ける私たち  
分断の構造を知り、解決の糸口を考える

大学院の学びを学部や他の一般の方に伝える取組みとしてシンポジウムを開催を企画していた岡田行雄教授。水俣病とハンセン病における「被害者分断」をテーマに準備を進めていたところ、緊急事態宣言が発出されました。「新型コロナウイルスにおいても、補助金給付における業種や留学生の線引きなどで『被害者分断』が生み出されています。今だからこそ伝える必要があるのではないかと思います。Zoomを使ったオンラインシンポジウムの開催を決定しました」と岡田教授は話します。当日は、愛媛や静岡からの参加者も。「これまでのシンポジウムでは参加できなかったような方にも参加していただき、オンライン開催だからこその良さも感じています」。

シンポジウムは6月6日に開催されました。当日は、登壇者だけが熊本大学に集まり、自らの体験や思いなどを語る形式で進行されました。

登壇したのは、水俣病患者救済のために闘い続けた故・川本輝夫氏の長男、川本愛一郎氏、らい予防法違憲国家賠償請求訴訟の第一次原告団の一人として国と闘った豎山勲氏、長年ハンセン病訴訟に関わってきた弁護士 福島の国宗直子氏、福島原発事故の損害賠償について研究する大学院人文社会科学部(法学系)の三谷仁美講師です。

川本氏は、劇症型で亡くなりながらも、2度も水俣病認定を却下された祖父と、すべての未認定患者のために闘い続けた父・輝夫氏の姿、さらに、チソンや国、県と闘う父が同じ被害者側からも誹謗中傷され、家族まで壮絶な差別を受けた経験を語りました。豎山氏が語ったのは、ハンセン病訴訟においても、考え方が違う元患者同士が分断されたこと、決して諦めず原告として闘い続けた元患者らが世間から「金目当て」と誹謗中傷された歴史。さらに、福島原発事故でも被害者の分断が存在して

いることが、三谷講師より報告されました。

ハンセン病訴訟においては、考え方が違ったり、誹謗中傷に耐えかねて訴訟を降りた人を残った人たちが非難せず、「あまねく救済を」と闘い続けました。そこには想像を超える苦難がありました。分断や差別は国民が生み出しているわけではないとおっしゃいます」と岡田教授。

シンポジウムでは、長年訴訟に関わってきた弁護士の国宗氏が、「被害者の分断は、被告側を有利にするだけ。団結は、勝訴する上で不可欠」と訴えました。水俣病やハンセン病の闘いに話を聞くことで、「まずは、差別や分断を生み出そうとする構造があることに気付いてほしい。気づいた後は、分断を起させないよう行政や司法を目指したり、一市民として声をあげたり、自分で考えて行動してもらえたらと思います」と岡田教授は、話してくれました。

研究成果を学外へ発信し、学びを提供することも熊本大学の重要な役割の一つです。多くのイベントやシンポジウムが開催中止となる中、オンラインでの情報発信と学びのきっかけづくりを行った、教育学部と法学部の取組みを紹介します。



大学院教育学研究科

塚本 光夫 教授  
つかもと みつお

大学院教育学研究科

前田 康裕 准教授  
まえだ やすひろ



教育学部/情報教育研究会セミナー

## 「遠隔授業で何ができるか」

より高まるICT教育の重要性  
長年にわたる情報教育研究の知見を共有

オンライン開催で  
全国から約300人が参加

ICT教育の重要性に着目し、塚本光夫教授が平成11年に立ち上げに携わった教育学部の「情報教育研究会」。「これまで月に1度、熊本県内の教員など40人から50人が集まり研修会を実施。一昨年、熊本市が市内の小学校へ2万4千台のタブレット端末を導入したことを機に、情報教育に関する研究をさらに積極的に進めていきました」と塚本教授。4月からは、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策としてオンライン授業に注目が集まったことを受け、ICT教育研究の一環として遠隔授業をテーマにしたセミナーを開講しています。

「オンライン授業については、現場の先生方にも差があります。3月頃から様々な話が耳に入り、オンライン授業の知見の共有が必要と考えました」と話すのは、塚本教授と共に研究会を行っている前田康裕准教授です。セミナー自体もオンラインで開催され、一回目には、東京など遠方からも300人近くが参加。参加者からはすでに小中学生3人

に1人の割合でタブレットが導入され、ICT支援員なども各小中学校に配置、感染症流行以前からオンライン授業ができる環境があった熊本市の状況に感心する声が多聞かれたそうです。

**社会全体に求められる「教育観」のアップデート**

セミナーでは、教育現場の、オンライン授業を含むICT教育への関心の高さがうかがえました。また、情報機器整備の地域格差や、子どもたちの学び方の違いの顕在化など多くの課題も見え、その解決はこれからの教育現場の使命だといえます。

「ICTは、オンラインだろうと対面授業だろうと、これからの教育現場に必要です」と塚本教授。これまでの教育は「1+1は2」で終わっていました。これからは、「1+1が2になる」とは、社会にどう貢献しうるか、という新しい考え方を教育に取り入れることが求められています。そのために有効なのが、タブレットなどの情報機器を使って多くの情報を収集し、活用していく能力の育成です。



5月23日にオンラインで行われたセミナーでは3人の事例発表が行われ、その後のグループ討議でも活発な意見交換が行われました。

感染症流行による混乱の中でも積極的に研究や情報発信を続けてきた情報教育研究会。その取組みが、教育現場、将来の教育を担う学生、そして社会全体に、「従来の教育観をアップデート」することの重要性を投げかけます。それは同時に、教育の明るい将来を築ききっかけにもなるのです。

※ICT: Information and Communication Technology(情報通信技術)

# 研究室探訪

Laboratory Report

## 先生 interview /

主に小児の発達について、認知神経科学的な手法を用いて研究しています。心理学は、あらゆる人間行動が研究対象。その勉強で培った視点は、心理学と無縁の職業であってもきっと役立つと思っています。



安村 明 准教授

VR技術を用い、高齢者の身体機能と知覚認知機能との結びつきを明らかにする研究を行っています。実験心理学分野は、見て聞いて触れて、体験してはじめてわかることがたくさん。学生の皆さんにはできるだけ体験して学んでほしいと思っています。



寺本 渉 教授

文学部 心理学研究室

寺本 渉 教授  
TERAMOTO Wataru

安村 明 准教授  
YASUMURA Akira

私たちは、どうやって「認識」している？  
見る、聞く、理解する、覚える、考える。  
一人の「知る」という行動。その全般が研究対象です



(2018年6月撮影)

### 学生が見た！

### 心理学研究室 3つの特徴

- 研究テーマ**  
人がどう物事や人物を知覚し、認識しているかを探究する基礎研究です。実験や演習等も多用し、人間を客観的に捉える心理学の考え方や方法を習得します。
- 研究手法**  
実験計画や統計処理も学び、自分たちでとったデータをレポートにまとめる中で、人の心の動きに関する新しい知見を生み出す力を身につけます。
- 先生**  
親しみやすく、次の考え方や行動を的確に助言し導いてくださいます。

### Lab's Data

- 卒論テーマ
  - ・視覚の連合学習に関する実験的研究
  - ・東洋人における顔情報の無意識的処理に関する実験的研究
  - ・視覚ベクシオンに関する実験的研究
  - ・無意識的体動同期現象に二人間の人間関係が与える影響についての実験的研究
  - ・身体所有感に関する実験的研究
  - ・恐れ表情観察時におけるVRT効果に関する実験的研究
  - ・顔の印象操作が再認課題に与える影響—感情の2つの次元と他人種効果の観点より—
- 就職先
  - 熊本県庁、福岡県庁、佐賀県庁、福岡市役所、(独)地域医療機能推進機構、品川区役所、(株)JTB ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング(株)損害保険ジャパン日本興亜(株)、日本生命保険(株)、第一生命保険(株)、SCSK(株)、ビーダッシュ(株)、(株)タナベ経営、(株)旭製作所、(株)SYSKEN、(一社)日本自動車連盟、アパホテル(株)
  - ほか
- メンバー
  - ・研究員2名
  - ・博士後期課程8名
  - ・博士前期課程2名
  - ・研究生1名
  - ・学部4年10名 ・学部3年7名

—どんな時、やりがいを感じますか？—  
予測していた結果と違う答えが出た時に、わくわくします。そして、その結果をリハビリの現場に導入し、うまくいって患者さんの笑顔が増え行動が変化した瞬間が一番楽しいと感じます。今後は、リハビリそのものや生活に対する、やる気や生きがい向上するような治療や訓練を提供できるようになりたいです。

—なぜこの研究室に？—  
私は病院で働いており、患者さんの記憶力や主観的幸福感とリハビリの効果の関連を感じていました。大学院の入試説明会や先生との面談で、認知症予防に関心が高く、社会人でも研究が可能な環境があることを知り、進学しました。現在は、高齢者の「主観的幸福感」と、記憶や意識、思考、問題解決などの認知機能との関連について研究しています。研究室には社会人学生が多く在籍しているので、多分野の見識に触れられ、ゼミでの意見交換もとても有意義です。



博士前期課程2年  
わたなべひろし  
渡邊 弘さん

—どんな研究室ですか？—  
鍋やたこ焼きを楽しむアットホームな面もあれば、白熱する議論を展開することも。学びも楽しみもことごとん真剣な、とてもよい雰囲気の研究室です。研究は難しく、うまくいかない時もあります。しかしこの研究室で、本気で何かに取り組むことは自分を成長させてくれると実感しました。努力が必ず報われるわけはありませんが、努力すれば、少なくとも後悔はないと学びました。

—現在、どんな研究を？—  
身体に何かが触れた時の触覚は、実は、自分の周囲の空間にまで広がっています。しかも、その範囲はその時の自分の心の動きなど、状況によって変化します。私は今、そういうヒトの心の動きが年齢によってどう変化するかを研究しています。研究は仮説を立てて進めますが、意外な結果が出て、それが何を意味しているのかを考え、そのメカニズムを論理的に構築している時もすごくやりがいを感じます。



博士後期課程1年  
くらた なおき  
黒田 尚輝さん



研究室のメンバーで楽しいひととき



心理学演習の様子

特集Ⅱ

# 今、熊本大学で学ぶ

熊本大学の学ぶ環境



今回は、熊本大学の先生方が  
熊本大学の学ぶ環境の良さと  
各キャンパスの魅力を  
紹介します。

3つのキャンパスに、  
7つの学部を有する熊本大学。  
それぞれ特色のあるキャンパスは、  
自然が豊かで  
学ぶ環境、研究する環境が整っています。



熊本大学キャンパスマップ



# 黒髪北

## 研究を基礎にした深い学びと 充実した手厚いサポートも魅力

研究者でもある教員の  
知識と情熱に触れられる大学

教育と同時に研究機関でもある大学では、教員自身が常に最先端の研究をしていることが重要です。「最先端の研究に携わる教員からは知識はもちろん、研究に対する情熱も学生たちに伝えることができると思います」と話す池邊摩依講師。熊本大学もそんな大学文化を残しており、赴任して、研究を基礎に、より良い教育を行うという姿勢を崩していないという印象を受けたと話します。「例えば私の研究分野においても、民事訴訟法の教科書から効率よく知識を得ることはできます。しかし、法とは、社会や歴史に根付いて存在しているも

の。法を深い目で見る研究者から法を学べるのが熊本大学の魅力。学生にとって非常に有意義です」。熊大生には、「情熱ある授業をしてください！授業がおもしろかったなら、それを伝えに来てくれるだけでも、教員にとっては喜びです」とも教えてくれました。  
赴任してまだ間もなく、熊本大学での研究や講義、自身の新生活の構築にも忙しい毎日を送っていますが、「教員も職員もとても親身に、丁寧に対応してくれます。教員である私がそう感じますから、学生さんたちに対してもより手厚くサポートしてくれるはず。そんな環境で4年間学べることは恵まれています」。

### 黒髪キャンパス北地区の魅力

緑が多く、空間が広くて豊かであるという環境は教養や専門知識を深めるために必要な「余白」。将来、ここで過ごした時間が財産と思えるほど、いい精神作用があると思います。



大学院人文社会科学部(法学系)講師  
池邊 摩依  
IKEBE Mai

### PROFILE

2017年大阪市立大学大学院後期博士課程単位取得退学。立教大学法学部助教を経て、2020年4月から現職。法学部で民事訴訟法の講義とゼミ、ドイツ語の外書講読を担当。

### 研究

民事手続における訴訟当事者の権利保障について、「公正な手続とは何か」を、憲法との関係に留意しながら研究。主に、ドイツの民事訴訟法との比較検討を研究手法としています。

五高記念館前の広場



工学部百周年記念館と総合研究棟

## 面倒見がよい先生たちと 学生に対する熱い指導が印象的

最先端の研究に触れつつ  
幅広い知識を身につけて

2020年3月に着任したばかりの工学部について、先生方の面倒見がよく、学生に対して熱い指導をされていると話すのは、稲田シュンコ・アルバーノ助教です。医学部と共有できる研究機器もたくさんあり、「研究者自身のレベルが高く、研究者同士が助け合い、目標に向かって頑張っている姿が印象的です」。

稲田助教の研究は、LEDを利用した医療機器の開発。熊本県八代市の出身の祖父を持ち、縁ある地に赴任して「医療機器を実用化し、地域貢献をしたい」と話します。

### 黒髪キャンパス南地区の魅力

大きな木々が茂り、野鳥も集まってくる広場には癒されます。また、総合研究棟9階から見える熊本市街地の夜景がきれいです。



大学院先端科学部(工学系)助教  
稲田 シュンコ・アルバーノ  
INADA Shunko Albano

工学における装置の研究開発は、作

るだけでは意味はなく、評価して初めて価値が生まれると稲田助教。医学と深く関わる自身の研究においても、工学に加えて生物学の知識をもつことで、自ら評価を行えることが重要であり、「これが、恩師である天野浩博士(青色LEDの開発でノーベル物理学賞受賞)の教え。人ができないことをできるようになれ、ということだと思っています」。もちろん、医学部や病院も有する熊本大学で、多分野における最先端の医療や研究に触れながら、自身の研究がより発展することにも期待を寄せています。「熊大生たちにも、専門以外にも幅広い知識を身につけてほしいと思います」。

### PROFILE

2012年名城大学大学院電気電子・情報・材料機能工学科修了。名古屋市立大学医学部研究科助手、名古屋大学大学院工学研究科博士研究員、弘前大学大学院理工学研究科助教を経て、2020年3月から現職。

### 研究

LEDの医療応用や医療機器開発を研究。白血病や悪性黒色腫などの病原細胞がもっとも細胞死しやすく副作用が少ないUVA1光のピーク波長を見出しており、その結果をもとに治療デバイスの開発と評価を行っています。

# 黒髪南



## 充実した学生教育と高度な研究で 人財の輩出と優れた研究成果発信の場に

薬草園と総合研究棟、産業イノベーションラボラトリー

### 大江キャンパスの魅力

大江キャンパスは薬学部だけの単独キャンパスで、施設を贅沢に使えます。また学部1年生から大学院博士課程の学生までが一堂に会しており、幅広い世代の盛んな交流が特長です。

### 学生ファーストの教育と 高い研究レベルが特色

「熊本大学の研究レベルの高さは特筆すべきものがある」と首藤剛准教授。多くの優秀な研究者が卒業し、これまでに多くの薬を世の中に輩出。研究者がミッションを共有し創薬研究に励む環境が薬学部内にもあると話します。また、県内外の企業が入居し創薬研究を行う新研究棟「産業イノベーションラボラトリー」や薬用植物園などの充実した施設なども挙げ、「大学ながら、製薬会社のような研究環境を達成していることが熊本大学薬学部の特色の一つです」。

さらに、様々な知識や専門の講義・

実習を通し、社会に貢献するための力を養うのが大学であり、「多くのユニークな教育プログラムが実践されていることが重要。そんな教育が常に学生ファーストの視点で展開されているのが熊本大学です」。薬学部では3年次という早期から卒業研究を開始、学生たちは、「科学的根拠に基づき物事をとらえる力」や「自らの考えを簡潔、単純、明確に伝える能力」なども修得します。また、語学力も含め、国際社会に通用する課題解決能力も身につけられると首藤准教授。加えて、大学ながら製薬会社のような研究環境が、「学生たちに本物を見極める力を養います」と話してくれました。



大学院生命科学研究所附属  
グローバル天然物科学研究センター  
准教授  
首藤 剛  
SHUTO Tsuyoshi

### PROFILE

2001年熊本大学大学院薬学研究科博士前期課程修了、熊本大学大学院薬学研究科遺伝子機能応用学分野助手。米国カリフォルニア太平洋医療センター研究所研究員を経て、2006年熊本大学大学院医学薬学研究部遺伝子機能応用学分野講師。2019年4月から現職。

### 研究

遺伝性難病や慢性閉塞性肺疾患(COPD)、自己免疫疾患など、満足のいく治療薬や治療方法が見つからない様々な病気に関する治療薬開発のための研究を行なっています。

## 教員や職員の密なつながりが生む 力強い協力体制で医療人を育成



医学総合研究棟

### 本荘キャンパスの魅力

熊本市中心部に近く、便利がいいことが魅力です。今年の春はお花見もできませんでしたが、研究室の窓から見る桜は見事で、設備だけでなく立地環境も本当に恵まれていると思います。



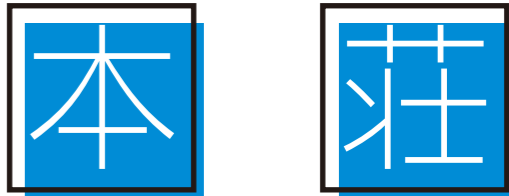
大学院生命科学研究所(保健学系)  
准教授  
坂本 史  
SAKAMOTO Fumi

### PROFILE

2004年3月福岡大学医学部医学科卒業。同年5月より熊本大学医学部附属病院にて研修医。2006年4月熊本大学医学部附属病院画像診断治療科入局。社会人大学院生として熊本大学大学院医学教育部医学博士課程修了。熊本大学医学部附属病院画像診断治療科助教を経て、2019年9月から現職。

### 研究

専門は核医学。特に認知症診断を中心に臨床に携わってきました。核医学とは、微量の放射線物質を用いて病気の機能を捉え診断する分野。認知症では、脳萎縮の前段階に起こるタンパク質の沈着を診断でき、より早期の診断につながります。



### 大学と学生の間の距離が近く 風通しもいいことが魅力

保健学科で放射線学を教えている坂本史准教授、「研究も教育も非常に活発で国際的。日本の中枢にある大学に引けを取らぬにやるんだ、という強い意志を持って研究されている方が多いと感じます」と語りまます。また教職員の密なつながりから生まれる協力体制が構築されていることが熊本大学の良さ、とも。学生のためにこうしたい、学生から要望があったから対応したいなどが、教員の間で頻りに議論されており、大学と学生の間の風通しの良さや距離の近さも形成しています。「これほど学生のこと

を考えている先生方に驚きました。私が学生なら、とてもありがたいですね」。大学では、専門も含めた様々な知識を修得するほかに、「人として大切なこと、直接接してこそ育まれるコミュニケーション力を身につけてほしい」と坂本准教授。「人間はみんな周りに支えられて生きています。特に医療に携わる人は、常にそれを意識しておかなければ患者さんに寄り添うことはできません。患者さんと話すことから汲み取らなければいけないことがたくさんあるのが医療です。大学ではぜひ、いろいろな人との交流を通して人間性を育むことを大事にしてほしいですね」。



## 熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

No.50 (令和2年2月1日～令和2年4月30日)

卒業生の皆様、在学生の保護者の皆様、法人・団体等の皆様、本学の退職者及び教職員の皆様から、これまでに約14億6972万円(令和2年4月30日現在)のご寄附をいただき、研究・教育に資する事業に取り組みさせていただきました。また、熊本地震復興事業基金へお寄せいただきました寄附金は、熊本大学の復興に向けて、被害学生に対する修学支援や被災しました建物の修繕費、設備・機器の更新・修理費のために、大切に活用させていただきます。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

今号では、令和2年2月1日から令和2年4月30日までの間に入金を確認させていただきました個人156名、14法人・団体等の寄附者すべての皆様へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公開を希望されない寄附者の皆様につきましては、掲載しておりません。

また、万一お名前に記載漏れがある場合は、誠に恐縮ではございますが、基金事務局(電話:096-342-2029)までご連絡ください。皆様のご更なるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 1. お名前・寄附金額の掲載

(寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※( )内の数字は、累計寄附金額(万円)です。

<熊本大学基金>

|         |                      |                      |           |             |             |
|---------|----------------------|----------------------|-----------|-------------|-------------|
| 【100万円】 | 上田 京二 (1300)         | 熊杏会 (700)            |           |             |             |
| 【50万円】  | 株式会社ケイ・アイ・ステイナー (50) |                      |           |             |             |
| 【30万円】  | 江崎 新二 (36)           |                      |           |             |             |
| 【5万円以下】 | 戸上 勝喜 (3)            | 渡辺 清吉 (4.5)          | 星野 徳光 (1) | 田中 好美 (1)   | 榎田 満洲雄 (1)  |
|         | 福多 修三 (4)            | 桑原 和博 (1)            | 古閑 孝之 (2) | 平野 史也 (0.5) | 後藤 重男 (1.5) |
|         | 本島 昭男 (24.5)         | 熊本大学医学部医学科後援会 (1029) |           |             |             |

### 2. お名前のみ掲載

(五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※[ ]内の数字は、累計寄附回数(回目)です。

<熊本大学基金>

|           |                      |           |                |           |            |            |           |
|-----------|----------------------|-----------|----------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 荒井 澄子 [7] | 今井 繁 [2]             | 上田 憲幸 [2] | 上田 理恵子 [7]     | 尾原 祐三 [7] | 神山 憲次郎 [2] | 川口 叫 [2]   | 川口 恭子 [4] |
| 神崎 芳郎 [8] | 木村 純久 [7]            | 清川 英之     | 児倉 静二 [10]     | 小山 公子 [2] | 坂田 満生 [15] | 佐々木 信生 [3] | 重浦 睦治 [3] |
| 新屋 一雄 [3] | 杉本 脩一                | 住田 大道     | 鷹取 勝征 [2]      | 高宗 俊雄 [6] | 瀧井 一信 [5]  | 瀧本 政江      | 田中 千佳     |
| 中村 真兒     | 林田 直子 [2]            | 原田 裕二     | 福田 翔悟          | 藤田 賢水     | 藤本 慈明 [6]  | 古田 清吾 [2]  | 堀 正俊 [2]  |
| 堀 幸人      | 本庄 敏夫 [2]            | 前瀬 啓子 [2] | 牧瀬 清剛          | 増田 俊次郎    | 松岡 誠也      | 松瀬 成子      | 松園 耕造     |
| 松田 亨 [6]  | 松平 嘉明 [8]            | 宮本 保 [16] | 村田 信一 [3]      | 安永 澄男 [3] | 矢野 照子      | 山本 努 [2]   | 吉田 光子     |
| 吉田 由美子    | 一般財団法人化学及血清療法研究所 [9] |           | 株式会社再春館製薬所 [5] |           | 株式会社新日本科学  |            |           |

### 3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

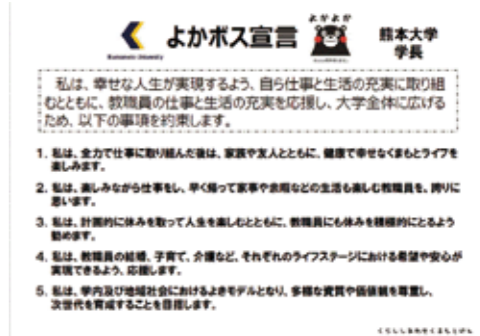
個人91名、6法人・団体等

## REPORT 「よかボス宣言」を行い、「よかボス企業」に登録されました

このたび、原田学長が「よかボス宣言」を行い、熊本大学が「よかボス企業」に登録されました。これからも教職員が働きやすい職場の環境整備に努めます。

「よかボス」とは、熊本県が実施するもので、「熊本を支える力強い産業の復活・発展と、魅力ある雇用の創出」や「県民の結婚・出産・子育ての希望の実現」を目指して、子育て環境をはじめとする誰もが働きやすい環境の整備など、県民総幸福量の最大化に向けた取り組みです。

※「よかボス宣言」は、「イクボス宣言」の熊本県版で、放送作家で脚本家の小山薫堂氏が命名したものです。



## REPORT 熊本大学発生活医学研究所と自然科学研究機構基礎生物学研究所が連携協定を締結しました

熊本大学発生活医学研究所と自然科学研究機構基礎生物学研究所は、令和2年5月26日に、連携に関する協定を締結しました。

本協定は、両研究所の発生活医学及び基礎生物学に関する研究分野において、相互に連携し、国際水準の先端研究を先導する研究教育拠点としての活動を推進することにより、その成果を双方の研究に活かすとともに、全国的な共同利用・共同研究の支援基盤強化ならびに国際的な学術交流の活性化に寄与することを目的としています。

なお、今回の協定は、新型コロナウイルス対策としてリモートによる調印式を試み、無事執り行われました。



基礎生物学研究所 阿形所長(左)、  
発生活医学研究所 丹羽所長(右)

## INFO 新型コロナウイルス支援基金(学生支援事業／研究支援事業)の設置について

熊本大学基金事業では、新型コロナウイルス支援基金を新設し、新型コロナウイルスによって経済的に影響を受けた学生への支援(学生支援事業)及び新型コロナウイルスで生じた課題を解決するための研究への支援(研究支援事業)を行います。

つきましては、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### ◆新型コロナウイルス支援基金(新規設置): 2つの事業

#### □ 学生支援事業

新型コロナウイルスの影響により、保護者等の経済状況の悪化や、学生アルバイトの休止等による収入減少によって、大学での学業を続けることが困難になっている学生が増えてきています。本事業においては、学生が学業を継続できるように短・長期的な奨学金として活用します。

#### □ 研究支援事業

新型コロナウイルスに対しては、ワクチンや治療薬の開発だけでなく、感染拡大を防止する様々な環境整備、そして関連する経済的・社会的な課題解決が短・長期的に要望されています。本学は、これら国内外における重大な課題を、生命科学、自然科学、経済・社会学の立場から解決すべく、基礎から応用までの幅広い観点から研究を推進します。本事業においてはそのための研究支援金として活用します。

寄附の方法等は、こちらをご参照ください。

熊本大学ホームページ: 新型コロナウイルス支援基金の設置について  
<https://www.kumamoto-u.ac.jp/kikin/corona/>



## INFO 大学院教育学研究科の松永拓己准教授が、アマビエのイラストを作成しました



コロナウイルス感染の終息を願い、「熊大通信」の表紙絵を制作している、本学大学院教育学研究科の松永拓己准教授が、アマビエのイラストを作成しました。アマビエが五高記念館を背景に学んでいるイラストです。こちらの画像は本学ホームページの「熊大通信バックナンバー一覧」からダウンロードしていただけます。



アマビエイラスト  
ダウンロードはこちらから

## INFO 令和2年度熊本大学オープンキャンパス開催のご案内

令和2年度のオープンキャンパスは、ICTを活用した教育が全国で広がるなか、ご自宅から熊本大学をご覧いただけるように、インターネットを活用し実施します。企画内容については、7月末に開設予定のオープンキャンパスの特設サイトでご案内します。

詳細が決まり次第、本学の公式ウェブサイト(<https://www.kumamoto-u.ac.jp/>)でお知らせします。

### 【質問 BOX受付中】

受験勉強の必勝法や大学での授業、学生生活など、先輩たちに聞きたいことをなんでも気軽にどうぞ。いただいた質問に個別の回答はいたしません。複数寄せられた質問内容については、「Q&A」のコーナーや、バーチャル・オープンキャンパスで先輩がお答えします！  
送信先: [kumadai-hatena@jimu.kumamoto-u.ac.jp](mailto:kumadai-hatena@jimu.kumamoto-u.ac.jp)

【問い合わせ先】  
熊本大学学生支援部入試課  
TEL:096-342-2146 E-Mail:[nyushi@jimu.kumamoto-u.ac.jp](mailto:nyushi@jimu.kumamoto-u.ac.jp)